
 学 会 記 事

第 250 回新潟外科集談会

日 時 2000年 5月13日 (土)
午後 1時30分～午後 5時06分

会 場 新潟大学医学部
有壬会館

I. 一 般 演 題

1) 当院で経験した食道穿孔の 2 例

多々 孝・小野 一之 (県立坂町病院外科)
西巻 正 (新潟大学第一外科)
鈴木 力 (新潟大学
保健学科)

症例 1 : 78歳女性. 平成11年 9月22日胃癌術前検査の上部消化管内視鏡にて頸部食道を損傷. 9月24日左頸部切開によるドレナージ術施行. 術後は良好に経過, 10月13日遠位側胃切除術施行.

症例 2 : 68歳男性. 平成12年 2月19日夕食時に魚骨の刺さった感じがあり, その後, 心窩部痛が出現した. 近医にて加療を受けたが症状改善せず, 発症 5日目に経裂孔的ドレナージ術施行. 術後人工呼吸器による管理等要したが, 47病日には経口摂取を開始した.

食道破裂, 穿孔は診断治療が遅延すると多臓器不全へ移行する可能性のある重篤な疾患であるが, 診断時期, 破裂状況など個々の症例の病態に応じた適切な治療の選択が重要である.

2) 切除不能, 再発胃癌による上部, 下部消化管狭窄に金属ステントを挿入した 7 症例の検討

大日方一夫・猪又 英子
篠川 主・鰐淵 勉 (南部郷総合病院)
佐藤 巖 (外科)

【対象, 方法】経口摂取が不可能な 7 例 (初発切除不能胃癌 2 例, 遠位側胃切除後の局所再発 1 例, 胃全摘術後の局所再発 2 例, Schnitzler 転移による直腸狭窄 1 例, 残胃癌による残胃・十二指腸狭窄と Schnitzler 転移による直腸狭窄を合併した 1 例) に対し金属ステント

(すべて Ultraflex) を挿入した.

【結果】上部消化管に挿入した 5 例はすべて経口摂取が可能となり, 1 例は補助輸液が不要となり退院した. 直腸狭窄の 2 例も便通良好となり経口摂取が可能となり退院した. 挿入後の合併症として違和感, 疼痛, 少量の出血を認めたが, すべて 1 週間以内に消失した.

【結論】金属ステントは手技的には容易で安全に挿入でき侵襲も少なく QOL の向上には極めて有用である.

3) 胃癌における末梢血および門脈血中の遊離癌細胞の検出

山口 和也・宮下 薫
大橋 泰博・浅海 信也 (燕労災病院)
北原光太郎・大黒 善彌 (外科)

【目的】Cytokeratin 20 の primer を用いた nested RT-PCR により, 胃癌患者の末梢血, 門脈血中の遊離癌細胞の検出を試みた.

【対象と方法】25例の胃癌手術患者の末梢血および腫瘍摘出前門脈血を採取し, total RNA を抽出後, nested RT-PCR を施行した.

【結果】(1) 末梢血, 門脈血における検出率はそれぞれ 0%, 40%であった. (2) 門脈血における検出率の内訳は, stage 別では, I : 14.3%, II : 33.3%, III : 100%, IV : 85.7%であり, 深達度別では, m : 0%, sm : 28.6%, mp : 0%, ss : 75%, se : 100%, si : 100%であった. 【考察】胃癌における門脈血の分子生物学的検索は, 進行度に伴いその検出率が上昇する傾向にあり, 異時性遠隔転移の予測因子となりうる可能性が示唆された.

4) 胃癌における TS, DPD および dThdPase 発現の意義

藪崎 裕・梨本 篤 (県立がんセンター)
田中 乙雄 (新潟病院外科)

【目的】胃癌における TS, DPD, dThdPase 活性値と遠隔成績との関係を検討した. 【対象と方法】胃癌 187 例の原発巣 TS, DPD, dThdPase 値を定量した.

【結果】1) TS 低値例は高値例と比較し遠隔成績は良好であった. 2) stage II・III における DPD 低値例は高値例と比較し, 全例および治療群とも遠隔成績は良好であった. 3) dThdPase 低値例は高値例と比較し, 遠隔成績は良好であった. 4) 多変量解析では TS のみが予後因子となった. 【総括】TS は進行胃癌に対する予後因子である. また, DPD 低値例における治療は,